

---

# アオゾラ 番外編

橋下ひかり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アオゾラ 番外編

### 【コード】

N9306N

### 【作者名】

橋下ひかり

### 【あらすじ】

『アオゾラ』に登場する笠原の昔語り。

## 第1話（前書き）

番外編は年齢制限がありませんが、『アオゾラ』本編は18歳未満閲覧禁止です。

このお話は橋下ひかり個人HP『HOPELESS WORLD』に掲載されています。

携帯閲覧用はこちらを利用させていただきました。<http://kibounnaisekai.jorougumo.com/>

## 第1話

そのとき、俺は初めて他人に見惚れる、ということを経験したのかも知れない。

いつものようにほとんどの園児が降園したひまわり幼稚園に元気に挨拶をしながら入っていくと、子供達にふざけて顔と言わず服まで泥をつけられた彼が水飲み場で顔を洗っていた。彼のことは知っていたが、まともに話をしたことがない。それでも仕事先の人だから「こんにちは」と声をかけた。

いつもはかけている眼鏡を外し、髪を濡らして後ろにあげた彼はいつもとは全然印象が違った。したたる水と、おぼつかない視力で頼りなげな表情がとても綺麗だと思った。

思わず、一瞬見惚れてしまったのだ。

タオルで顔を拭き、まだ少し泥の付いたメガネをかけた彼が俺を見て照れくさそうに笑う。

「こんにちは」

ダメだ。やられた。

この瞬間俺は恋に落ちた。

小さな頃からサッカーをしていた俺は、サッカー推薦で地元では有名な強豪校に入学した。

Jリーグが設立されて数年、熱狂的なサッカーブームも少し過ぎ、次第に実力のある選手が頭角を現して徐々に世界に進出し始めた頃、自分もその一人になれると信じ、憧れて日々をサッカーばかりに費

やっていた。

高校は自宅からは遠いため、下宿をしていた。

サッカー部は上下関係や規則など、さすが、全国大会常連校だけあって厳しかったが、それなりに俺たちは先生や上級生の目を盗んでいろんな事をした。

酒や煙草を覚えたのもこのころ。女の体を覚えたのもこのころ。それと、自分が同性でもこだわりなく体を重ねることができると知ったのもこのころだった。

クラスは違ったが、同じ学年で同じサッカー部だった白井祐次とは特に仲が良く、昼飯も放課後も休みの日でさえよく一緒につるんでいた。

特にヤツに恋していた、と言うわけではなかったが、何となく成り行きと興味本位で体を繋げたこともあった。男女交際禁止だったサッカー部ではさすがに特定の彼女を作ることでもできず、さりとしてサッカーだけでは発散できない若いエネルギーをお互い遊び感覚で解消していた。

高校3年の春。ヤツはグラウンドを去った。

たまたまその時俺はいなかったが、他のサッカー部のメンバー数人と学校の片隅で煙草を吸っているところを運悪く先生に見つかり、強制退部となったのだ。学校の方は数日間の停学で済んだが、ヤツのプロ入りという夢は絶たれてしまった。

停学が明けてしばらくは荒れていたヤツと、最後の高総体へ向けて一段と練習の忙しくなった俺とは疎遠になり、ヤツとはその後一度もゆつくり話をすることもなく卒業してしまった。共通の友達からはヤツは実家の酒屋を継ぐらしいと聞いた。一方俺は、高総体で華々しい結果を残せず、高卒でプロ入りとは行かなかったが、大学からスカウトが来て勉強もろくすっぽできないくせに進学した。

大学に入ると、一人暮らしを始めた開放感から、かなり乱れた生活を送っていた。

もちろんサッカーは続けていて練習にはちゃんと顔を出していたが、大学の講義はさぼる、朝まで酒は飲みまくる。男女問わずお持ち帰りをする。素行は悪かったが、なぜだか憎まれないので調子に乗って遊び回った。

俺の知らない間に、「俺の彼女」の座に居座る女もできたりしたが、身の回りのことをしてくれたり、俺の都合の良いときに夜の相手にもなってくれたりしたから、そのままにしておいた。まあ、俺の気持ちが変わらないと言って必ず女の方から出て行かれたもんだが。

そんな俺にもヤキが回ってきた。

大学3年の冬、そろそろ本格的にプロ試験を受けようと思っていた矢先、俺は試合中のラフプレイでケガをする。

膝を壊した。思った以上に怪我の状態は酷く、プロで通用するほど世の中は甘くなかった。

完治にまで時間をかなり要したので、その間にも友達は次々に就職を決め、卒論に追われ、一人取り残された気分になる。毎日が色あせた日々だった。

それでも体はボールを蹴りたがる。

小さい頃から染みついた習慣がなかなか抜けない。

本当に自分からサッカーを取ったら何も残らないのだと言うことを思い知らされた。

こうやって、落ち込んでいるときにこそそばにいて欲しい人というモノはいなくて、図に乗っていた自分を振り返り更に落ち込んだ。

夏休み、今までなら当たり前のように練習に打ち込んでいたのに、今年は何もない。結局大学のサッカー部も除籍になってしまっ

た。

することもなく、仕方がないのでしばらく実家に帰ることにした。暑さと蝉の鳴く声にうんざりしながらも、懐かしい地元を散歩することを思い立つ。

そう言えば、同級生達はどうしているだろうか。

将来を囑望されながら、結局夢やぶれて帰ってきている惨めな自分をみんなに知られることはできなくて、誰にも連絡を取っていないかった。

ふらふらと近くの公園に入り、日陰を見つけてベンチに座る。

あまりの暑さで、人はほとんどいなかった。

ぼんやりと視線を漂わせていると、公園の入り口にバイクを止めて入ってくる人物に目がとまった。

「宏之？おー！宏之じゃん！久しぶり！！」

「祐次・・・？」

頭に白いタオルを巻いて、白いノースリーブの肌着、ジーンズの上にはデニムの大きな前掛け。運動靴を履いた出で立ちは、まるつきり酒屋の大将だった。

相変わらずの男前な顔にはあのころの幼い印象はまるでない。

「何？おまえ今帰ってんの？」

「ああ・・・」

懐かしいような、それでいて、一緒に追っていた夢をつかめなかった申し訳なさや情けなさで顔が歪む。

中途半端で別れてしまっていた後悔も心の何処かでくすぶっていた。

「配達 of 帰りに通ったらさあ、何か、見たことあるヤツがいると思つて。わざわざ戻って来ちゃったよ」

につこり笑う日に焼けたその顔に白い歯が浮かぶ。

変わらないようできて変わってしまったている。

自分も祐次も。

なんだか、急に切ないような悔しいような言葉では言いがたい想

いがあふれてきて涙が頬を伝った。

次から次へと流れる涙を抑えきれない。

声を殺して、肩をふるわせて泣く俺に、最初、祐次は驚いたようだったが、何も言わず、ベンチに座る俺の頭を抱き寄せ、道路から見えないように前に立って壁になってくれた。

いつの間にか、蝉の声は蝸の声に変わっていた。

「そっか、残念だったな」

ひとしきり泣いて、恥ずかしかったが、今の自分の状況を吐露し、不安と不甲斐なさを祐次に聞いてもらって少し落ち着いた頃、隣に座って黙って話を聞いていた祐次がぼつりと言った。

「しばらくはこっちにいるんだろ？」

「まあ、盆明けぐらいまでは・・・」

「今度の日曜、ちょっとつきあえよ」

夕方の風が吹く。

「いいけど、何？」

「草サッカー。最近チームつくつてさ。夕方から練習試合があるんだよ。おまえちょっと助っ人で入ってくんねえ？」

にやりと白い歯を見せて笑う。こういう表情は変わってない。

「え？」

「サッカー自体は嫌いじゃないんだろ？絶対勝てとか言わないからさ、頼むよ。メンバーもいいやつばっかだし」

「うーん・・・」

あまり気乗りはしなかったが、祐次は早く帰らないと親父にどやされると言っつて、返事を保留にしたまま帰って行った。



## 第2話

日曜。

家でゴロゴロしてばかりだと母親にぶつぶつ文句を言われるので、仕方なしに出かけることにした。久しぶりに帰った実家も、最初の3日は歓待されたが、1週間経つ頃には邪魔者扱いされた。

祐次の実家の酒屋は隣町にあるので、バスで出かけることにした。バスを降りて、祐次の店に行く。その短い間にすっかり汗だくになつてしまった。

「いらつしゃいませ〜」

クーラーの効いた店内にはいると女性の声で迎えられた。

最近改装したのだからか、結構新しい綺麗な店内に、各地の地酒が見栄えよく展示されている。カウンターの中には若い綺麗な女性がいた。

「あれ？笠原さん・・・じゃないですか？」

「はい・・・そうですが」

俺の方には全く見覚えがなかったが、おずおずと聞いてくる女性の方は俺を知っているようだった。

「あ、あの、あたし、恵美です。覚えてないかも・・・白井祐次の妹の・・・」

「あつ！」

思い出した。高校のころ、何度か祐次の実家に遊びに来たときに見たことがある。あのときは確かまだ小学生か、中学に入ったばかりだったはず。女っていうのはこうも変わる物なのか。

「ええ〜〜？！びっくりした！すっかり大人になっちゃって」

「やだ、笠原さんもすごく大人っぽくなってますよ」

「ころころと笑い転げる仕草が、かわいらしい。」

「恵美ちゃん、ごめん、店番替わるわよ？あ、お客さん？」

店の奥からもう一人若い女性が出てきた。心なしかお腹が大きい

ような気がする。

確か祐次は恵美ちゃんとの二人兄妹だったはずだ。と、すればこの人は……

「ありがとうございます。お義姉さん。あ、お義姉さん、こちら笠原さん。お兄ちゃんの高校の時の同級生。笠原さん、こちら真由美さん、お兄ちゃんのお嫁さん」

やっぱり。

ショートカットでちょっと出来る女風のきりりとした顔つきの美人だった。

「はじめまして。笠原です」

多少動揺した物の、俺は笑顔の中に押し込める。

「はじめまして、真由美です。お話には聞いてました。今日も試合に駆り出されたんですってね」

うふふ、と笑うと急に雰囲気は柔らかくなる不思議な人だ。

「ええ、まあ」

曖昧に笑って返す。

「ちょっと待ってくださいね、今呼びますから」

「あ、あたしもう奥行くから呼んでくるね。笠原さん、ちょっと待っていてください」

そう言い置いて、ぱたぱたと恵美ちゃんは奥へと消えた。

「正直、びっくりしましたよ。祐次のヤツ結婚したなんて一言も言っていないから」

苦笑しながら話を続けた。二人で取り残されて会話に困って出たのがコレだった。

「結構、長いこと連絡取ってなかったんですってね？この前すごい浮かれて帰ってきたから何かと思っいたら何年も会ってなかった友達にばったり会ったって言って。相当嬉しかったみたいですよ？」

カウンターの上の小物を片付けながら笑う。

「あんまり懐かしさの方が勝っちゃって、今のことを話す余裕がなかったのかも知れませんか」

確かに、この前会ったときは俺の方がいっぱいいいっぱいで、今の祐次のことを聞く余裕なんてなかった。

「失礼ですが・・・おめでたですか？」

女性に直接聞くのは聞きにくかったが、気になって仕方がなかったので思い切つて聞いてみた。真由美は頬を朱に染めて恥ずかしそうに笑った。

「今6ヶ月なんです。お恥ずかしい話なのですが、結婚よりもこっちの方が先だったんで」

バタバタバタと階段を駆け下りる音が聞こえて祐次が顔を出した。「わりい！！宏之！今車回すから！」

大荷物を持った祐次が顔を出す。

そのまま店の中を通つて表から隣のガレージに向かつていった。

俺は、真由美に苦笑しながら「じゃあ」と言い残して祐次の後を追った。

祐次の運転する軽トラの助手席に座り、エアコンの効かない暑い車中で窓から入る風に吹かれて自嘲した。

やはり、時間は流れているのだ。

懐かしい顔に会ったからと言つて、そこで時間は戻るわけではない。祐次の知らない俺の時間があるように、祐次にだって俺の知らない時間があるのだ。

「しっかし、驚いたな。祐次がパパだつてよ」

「俺だつて、まだ実感わかねえよ」

前を見て運転しながら笑う。だが、その顔は幸せそうだ。

この前はタオルで巻いていて気が付かなかったが、茶色に染められた短い髪が日に当たつて金色に輝いている。

「祐次つてこんな手え早かつたっけ」

「ばっか、真由美とはもう3年のつきあいだから、早かねえよ」

「そっか・・・そうだよな・・・俺とは丸4年も会ってなかったんだから、色々あるよなお互い」

「泣くなよ?」

意地悪げにいう祐次が憎たらしい。

「泣くかよ、ばーか」

「ま、そのうちお前にも大事な人ができるさ」

「恥ずかしげもなくよく言うよ、まったく」

げらげらと笑うと高校時代とリンクしたようであり、お互い大人になった自分たちをしみじみと感じた。

結局、なし崩しに、祐次のサッカーチームのメンバーに引き合わせられ、「助っ人だから」と紹介され後に引けなくなつて試合に参加した。

レベルは、それはもう大学のサッカー部とは比べものにならないほどお粗末なもんだつたが、久しぶりに何にも追われることなく純粹にボールを追いかけることが出来た。

何年も、こんな気持ちの良い汗をかいていなかった。

改めて自分はサッカーが好きで、サッカーをするしか能がないことを思い知つた。

俺はサッカーから離れられない。

試合は俺の助っ人の効果があつてか、5 - 0で圧勝した。

芝生にごろりと仰向けになつて天を仰ぐ。

視界に祐次の顔が入る。

頬に冷たい何か当たる。

「お疲れさん、ほい、ビール」

「さんきゅ」

体を起こし、祐次と二人で並んで座る。ビールの缶を開け、乾杯をしようとして祐次の持っている物がスポーツドリンクなのに気づ

く。

「ああ、俺車だからな。酒屋のせがれが飲酒運転で捕まるわけには  
いかないだろ」

笑って、自分の缶を俺のビールに当ててごくりと気持ちよさそう  
に飲み干した。

「やっぱさあ、宏之サッカーしてるときかっこいいよ」

ぼつりと祐次がつぶやく。

「ホントに好きなんだな」って思うよ」

照れくさそうにこちらを向く。

「・・・うん、俺も自分でホントに好きなんだなあって思ったよ」

遠くに視線を投げてしばらく沈黙が続く。

「やめたくねえなあ・・・サッカー・・・」

「うん」

次第に紺色に染まる空に一つ二つと遠くの明かり見え始めた。

### 第3話

数日後、祐次と連絡先を交換して、俺は大学に戻った。

とりあえず、単位だけは確保して、まじめに卒論の仕上げにかか  
る。それでも何とか、サッカーに関わる仕事が出来ない物かと大学  
の就職センターに相談したりもした。

そんな折、祐次から久しぶりに連絡があった。

草サッカーで交流試合をしたときに、たまたま俺の話題が出て、  
相手チームの中に、ある程度本格的にサッカーが出来る人材を捜し  
ている人がいる、と言うのだ。

職種は、某大手の幼児教育の会社で、幼稚園児から中学生までを  
対象としたサッカーチームのコーチをメインに営業や他の仕事をす  
るらしい。即戦力として迎えたいから、もしやる気があるのなら早  
めに面接に来て欲しい、と言う物だった。

実際サッカー部もやめて久しいから、実業団などで自分が選手と  
してプレーするのはほぼあきらめていたが、コーチというのは考え  
ても見なかった。自分でも、子供を相手になら教えることも出来る  
かも知れない。

新しい選択肢を見つけた俺は一も二もなく連絡を取り面接に行っ  
た。

幸運なことに先方に気に入られほとんどん拍子に就職が決まった。

そして、俺は再び地元に戻ったのだ。

あれから数年、就職当時から会社の近くにアパートを借り、一人  
暮らしを続けていた。

相変わらず祐次たちとは一緒に草サッカーを続けている。祐次の息子も自分の教えているサッカーチームに入ってちびっ子ながらに良いセンスでボールを追いかけている。

子供たちや、応援に来る保護者、祐次たち親子を見ていると結婚に憧れもしないでもなかったが、どうしてもこの人と結婚したい、と思える女性に会うことはなかった。

それどころか、結構長くつきあっていた彼女に二股をかけられて、さんざん罵られて別れてしまったから、俺の女性不信は募ってしまった。

そろそろ、この痛手から立ち直りつつも、新しい彼女を作る元気が出ない頃。俺は彼に出会ってしまった。

派遣されていた幼稚園の一つに彼はいた。

最初は目立たない、おとなしい男だな、と思っていたただけで気にしていなかったが、祐次の妹の恵美ちゃんも同じ幼稚園に先生としていただけに、この幼稚園ではことさらに心証を悪くしたくないと思つてさわやかぶつて接していた。

週に1度しか来ないので、その男に会うのも数えるほどだったが、あの、無防備でいて淡い色香を持った素顔を見たときの、その衝撃たるや今まで出会って付き合ってきた女たちの比じゃなかった。もちろん祐次よりも。と言うよりは、今まで自分の周りにいなかったタイプだったのかも知れない。

自慢じゃないが、結構な数の男も女も経験してきた俺が、こんなにのめり込むと思わなかった。

それでも、今までの恋愛遍歴のプライドが邪魔してなかなか自分から声をかけられない。

20代も後半半ばにさしかかり、いったい自分で何やってるんだと思いつながらもたまに隙を見て姿を追いかけることしかできなかつ

た。彼はかなりの働き者で、ちょこちょこいつ見ても忙しそうに働いていた。

それが、ある時、やたらと目が合うことに気が付いた。

そして、決まって彼はその後恥ずかしげに目をそらしてしまう。

そう言うことが何度かあって何となく彼の方も自分に気があるのではないかと思い始める。今まで自分から告白などしたことがなかったから、相手の気持ちがあつきりわかるまで動き出せなかった。

それでも彼を見つめ話をするごとにどんどん彼に惹かれていく自分を押さえられない。

彼が自分に好意的だとわかるや、もう彼と話すのが嬉しくて、そばにいたくて、自分のものにしたくて、何度も何度も彼を手に入れる夢を見た。

彼の細い肩に触られたときは抱きしめそうになる自分を押さえるのに苦労した。

こんな自分は知らない。自分の中にこんなに他人に対して激情を持つなんて信じられない。

だけど、そんな熱に浮かされている自分が心地よかった。

こんな恋は初めてだ。いや、そもそも、今までの恋愛なんて恋愛じゃなかったとさえ思う自分がおかしい。

相手のことを想い、相手を大切にしたい。今までの相手にそんなことを思ったことはなかった。そう思えば、今まではずいぶんと自分勝手な恋愛をしていたのだと反省する。

そんな彼のことを考えてばかりの毎日が何日か過ぎた。

ある土曜日、久しぶりにサッカーの練習で祐次に会うと、祐次は



すぐに俺の変化に気が付いたようだ。

「おう、どうした浮かれて」

からかうように俺の首に腕を後ろから絡めて絞める。

「とうとう彼女が出来たか」

「残念ながら、違う」

意味ありげに笑うと、「白状しろよ、この野郎」と言いながら頭をぐりぐりとかき回されてしまった。

練習が終わり、二人で打ち上げをする。

居酒屋で酒を酌み交わすうちについ口を滑らせてしまった。

「もう、俺ダメだな。こんなに人に惚れたの初めてだわ、きつと複雑な顔をして話を聞いていた祐次がグラスの焼酎を一口飲み、息を吐く。

「珍しいな、お前がそんなに奥手になってるなんて」

苦笑いをしながら合いの手を打つ。

「男同士、つてのは俺もお前と間違いがあつた手前、反対は出来ないけどさ。お前がそこまで言うなんてよっぽどだな」

「なんだよ、ヤキモチ？」

「ちよつとな」

「バカ言うなよ！ さつさとガキつくって結婚したヤツ誰だよ」  
酔っぱらってる上での戯れ言か、本気かは知らないが、お互いそれだ、だからといってどうにもならないことを知っている。

俺たちはもう、ただの親友だから。

「俺よりもお前のファンが悲しむな」

「冗談めかして祐次が言った。」

「なんだそれ、俺にファンなんかいるかよ」

「知らないのは本人だけだな」

げらげら笑って酒をあおる。俺は本気でその時は全くの冗談だと

思っていた。後日斉藤から、そのことを問いつめられるまで。

数日後、色々あって、俺とマモルは心の底から結びつく。

こんなに充足した関係は初めてだった。

恋愛は一人では出来ないと言うことも思い知った。今までの歴代の相手には申し訳ないが、俺は彼に出会うために今までを生き延びたのだと思う。

そうして、俺の過去は完全にセピア色に染まっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9306n/>

---

アオゾラ 番外編

2010年10月8日14時00分発行